

だから決めた。できれば長生きすることに
年とってから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのようにね

この詩は戦争と空襲とそれに続く敗戦後の混乱の中に青春を過ごした女性作家、茨木のり子が自分の体験に即して平和への願いを歌った詩である。

戦争は若者の男性だけのものではなかった。非戦闘員の母も妻も娘も老いた父も、そして子供たちも皆闘つて敗れた。そして命と共に数知れない家庭が町が歴史が跡かたもなく焼けただれていった。戦争の落とした暗い影は永遠に消すことはできない。私の今後の生き様もルオー爺さんのように、年ごとにめっきり少なくなつて来つつある五歳、十歳、ひと回り年上の憧れの爺さんを見付けて、さびしかった人生を長生きしたいものだと思う。

山西軍の悲劇 終戦後も戦う

岐阜県 大山盛男

私の軍歴は次のようである。

昭和十八年十二月一日、現役兵として大阪歩兵第八連隊へ仮入営。十二月十四日、北支河南省柘城たくじょう県騎兵第四旅団、第二十五連隊へ入営。

昭和十九年二月、第五十九師団司令部へ転属。同年三月歩兵第十四旅団、独立歩兵第二百四十六大隊編制完結。北支山西省南部の警備。

昭和二十一年三月、中華民国第二野戦軍総司令官閻錫山に留用される。

昭和二十三年五月留用解除。同年五月末山東省大沽港より引揚船「日本丸」にて佐世保上陸。

ここに留用という言葉があるが、日本軍武器の争奪をめぐる国共戦争の中で、戦後五十年に至る今日まで、

正式な軍務と認められない勤務のことである。その留用期の初期、武器をめぐるの共産軍との戦いについて書くこととする。

昭和二十年八月十五日、その晩、村山中隊長は全員を起こして集合させ、日本がポツダム宣言を受諾したことを涙を流して伝えた。翌日はただちに中隊を二分し、三カ所の分遣隊と日本人のいる炭鉱の引揚げを完了した。敵は早くも日本軍の敗戦を知っており、我々の武装解除に出て来た。

軍の命令で武器は一切共産軍に渡してはならない。国府軍に渡すまで徹底的に戦えとの敵命で、東西の城門に衛兵を増員。炊事ではありったけの御馳走をつくり、汁粉、酒と飲み放題。敵が城門近くまで来ると押取刀でかけつけ、これを撃退し、帰ってからまた飲んだ。

十八日、体力の弱い者、病人を後方の山西省沁泉城へ送った。その晩、沁泉城へ約三千名の敵が襲撃。梯子で城壁を登り始めた。わずかの兵力で守っていた友軍は手榴弾などでこれを撃退。一部城壁を破られ敵が

侵入。彼らは撃たれても撃たれても前進してきたが山砲の零距離射撃で撃退した。

太原方面への喉首にあたる沁泉城がこのとき敵の手に入っていたらなら我々の運命もどうなったか……。実によく守ってくれた。

十九日、再度敵襲の心配があり、旅団引揚げの援助もせねばならぬので、屯留泉城を撤収して、沁泉との中間付近の山一帯の警備についた。ひっきりなしにトラックが往復していた。ここに二日ほどいてまた沁泉城に戻ったが、暑さのため、ふくれあがった敵の屍はほとんど裸で、足の踏み場もないほど散乱。その臭いたるやたまったものではない。その間を通過して山頂への分哨に向かうのであった。

我々の頭上を山砲が試射をして距離を計っていた。その夜は豪雨で天幕に入っていたが、禪まですぶぬれで、敗戦の惨めさをつくづく感じた。

翌日、中隊は後方へ退く陸軍病院の護衛で列車に乗、全員出発。途中、鉄道が破壊されて動けず五日ほど山の上で警戒、修復を待つなどして、出発から二十

日ほどかかって目的地、榆次ウジの貨物廠についた。十月までこの警備に当たった。

再び沁県警備につく

日本軍と交代し路安にいた山西軍が共産軍に攻撃されているというので、武器を持った有力な一個師が応援に出て行った。沁県にはまだ一部、日本軍が残っていた。しかし、彼らは中共軍に完全に叩かれ、ほとんどが降服。いよいよ沁県城が山西軍の第一線陣地となつてしまつた。

このことがあり、二度と来ることもないと思つて沁県城の警備についた。

昭和二十一年の正月は実に哀れな正月だつた。思うように列車が動かず米はほとんどなし。糧秣拾集に出動しても敵に撃たれて無収穫の時もあつた。山羊の二、三頭、粟や小麦粉を取つて来て、どうにか飢えをしのぐ状態だつた。煙草もなく、余暇にパイプを作つたがそれもなくなり、吸殻を拾つて歩く始末だつた。

夜、分哨に立つと故郷の家族のことが安じられる。

狼の鳴く声はらわたに滲みわたるようだ。

こんな状況の中、突然第一軍参謀長山岡少将から全軍に布告が出された。第一軍將兵五万人の復員、帰国について、第二戦区軍司令官から次のような要請があつた。それは將兵及び技術者一万人の残留、さらに十万名の日本人の護衛尖兵となり、一日も早く復員、帰国完了をしたいというものだつた。

第一次大戦では終戦二年後に講和条約が締結されたが、今度もそのようになると思う。狭い日本にとじこめられた日本人も条約が出来れば、この大陸へ進出するだろう。そのときこの山西の地で一人の日本人が健在ならば、移住するのに便利だし、残留者で永住したい者は家族を呼べる。残留期間は二カ年。その間、山西軍に日本軍の教育を徹底的に行い強固な軍隊にしたい。

以上のような内容であつた。隊長会議が何回も開かれた。各人呼び出された。特に年次の若い者に残留するよう奨められた。私は長男であつたが、中隊長、第一小隊長が残ること、同年兵も半数ほどが残留するというので残ることを決意した。

大陸への足がかりを残すため残留

二月末、私は大隊残留者十数名と先発隊の一員として旅団本部に近い南団柏部落へ到着。嗜好品などは沁県を発つとき受領してきたので列車の中は楽しかった。しかし、旅団本部の連中はたらふく食って遊んでいるのにはあきれかえった。最前線の部隊は飢えに苦しんで戦っているのに……。軍隊ほど苦楽の相違がある所はないとつくづく感じた。

その後、残留者は太谷県に集合。布川部隊長のもとに保安第六大隊を編制して付近の民家に宿営した。約半月ほど中共軍に押されて後退した山西軍の救援に出撃。今まで体験したことのない激しい戦闘を繰り返した。

戦火がやむと大々的な幹部教育に入った。純日本式の教育で、不動の姿勢から始まり、銃剣術、騎馬戦、棒倒しなど主として攻撃精神の養成に力を入れていた。この間、敵に山西軍が押されると訓練を中止しこれを撃退。また教育することが度々であった。

そんな中、徐々に慰安所、食堂などができ、生活に

は苦労はなかった。だが、私が帰国につくまでの二年間で多数の戦死者が出た。

陽泉にいた第五大隊は三分の一が家族持ちであった。ここには城壁がないため、敵に包囲されると、いったんは山に入って交戦したが、家族がいるため脱出できず降服。全員捕虜となり、約三カ月後、北京の近くへ乞食のような姿で帰されてくるということもあつた。

二十二年十月、傷病人、未亡人、家族などが第一次の帰国を許された。翌二十三年、この次はどうしても帰国をしたいと準備していたところ、五月、帰国が認められた。隊長たちはなお残留を勧めたが決心は変わらなかった。今まで持っていた銘刀を残留の人に譲り、太原飛行場を出発して北京へ。一週間ほど宿泊後、天津へつき、二十七日、大沽港へ迎えにきた引揚船日本丸に乗った。まる四年半、各地を転戦した大陸を後にして、鏡のように静かな東支那海を渡り、三十日無事佐世保港へ上陸した。

その後の太原

我々が帰国後、七月中旬、有力な共産軍が出撃。こ

れに対し元泉少将が総指揮をとり大部分の日本部隊は山西軍と共に迎え撃った。善戦したと聞くが、敵の砲撃で少将をはじめ、第一、第三、第六大隊長も戦死。今村大佐の部隊のみ脱出したが、他の部隊はほとんど戦死。あるいは捕虜となった。

その後、最後まで太原にとどまった四、五百名の兵士を残し最後の引揚げが行われた。このとき太原はまったく孤立。死闘を繰り返し、頑強に抵抗したが、二十四年四月二十四日、ついに敵に太原城を開放した。今村大佐は自決。残りは全員捕虜となった。私の中隊長だった村山中尉らは戦犯として労役に服した。小隊長級は二十七年から九年にかけて帰国。中隊長級は三十二年によく帰国を許された。河本元大佐、岩田少佐は獄死された由。

祖国の復興を夢に見て、山西省に残留。大陸への足がかりを頼った日本軍も大勢の力には勝てず、多くの戦死者が大陸の土と化し、今なお山西の地に眠っている。

山西省にいた第一軍の将兵の一部が戦後に戦ったかという知られざる事実を知っていただくために、あえて労苦の実体を記述した次第です。

【解説】

終戦前後から北支においては国民政府軍、特に閻錫山將軍（中国軍第二野戦区司令官）と共産八路軍の相克が盛んになり、特に日本軍武器の争奪をめぐつての衝突が各地区で起こっていた。

閻錫山は、中国国民党総司令官何応欽將軍からの連絡で、ソ連軍の対日参戦、日本軍の無条件降伏についても知らされ、同時に在山西省内日本軍の無条件降伏の受降官に指名され、また日本軍人戦犯の摘発、日本軍人及び日本人居留民の日本への帰国援助、日本軍引き揚げ後の山西省の治安維持についての命令を受けていた。

閻錫山司令官は、黄河沿いの各地に分散駐屯していた三万の隷下部隊を五梯団に分けて列車輸送により太原へ進出することにした。しかし各部隊とも、途中何

回か、共産軍の襲撃を受けて進路を阻まれ、なかなか太原へ到着ができなかった。

日本軍第一軍は閻錫山軍の太原進出に協力した。閻軍の第一梯団は八月二十五日考義に到着。翌二十六日閻軍司令官主力が到着し、第一軍山岡参謀はこれを出迎えた。

その時、閻錫山將軍は、真剣な表情で、山岡將軍に「日本軍は負けたとはいえ、よく統制され、規律のある貴官の部下將兵を見て羨ましく思う。日本軍は中国軍に負けたのではない。米軍の物量に負けたので、精神的に敗れていない。優秀な日本軍をして、私に協力してくれませんか」との意外な申入れがあったという。

山岡参謀長は意外な申し入れに戸惑い、「重大な問題であり即答はできません。司令部で検討の上希望に叶えられるよう返答します」と答えたため閻錫山を力付けたようである。また、將軍は「日本軍第一軍の降伏受降官は私ですが、我が方は兵力も少なくこれから増員するが直ぐには役立たない。したがって日本軍の武装解除は行わない。別命あるまで、従来と同じく保

安任務に当たって欲しい」と重要な発言を行っているが、第一軍首脳はなんらの質問もしなかったという。そのため閻將軍らはこの要望を了承したと理解してしまつたようである。

閻將軍は日本軍の受降官であるという権限により要望していたが、これと同時に、日本人居留民にも「日本人の皆さんは、この山西に残つて、私に協力してもらいたい。皆さんの生命、財産は絶対保証する。経済的にも十分に報奨する。将来の生活は希望に沿つて世話したい」と残留、協力を呼び掛けたのである。

日本軍とすれば当然、天皇陛下の命による詔書を必謹しなければならぬ。という絶対命令を守らなければならなかったが、現地の国共紛争と在留邦人らの早期帰還に対する状況判断に、山西軍残留という悲劇を生んだものと思う。閻錫山は表裏、軍官民に対する老獪な手口で、自分の目的を達成しようとしたものであろう。

終戦時の支那派遣軍、北支方面軍隷下第一軍の編制

は次のごとくである。

第一軍（乙第三五〇〇部隊）軍司令官中将 澄田 謙

四郎

第一一四師団（将第一四六〇部隊）

独立混成第三旅団（造第三五八一部隊）

独立歩兵第十旅団（固第三一四一部隊）

独立歩兵第十四旅団（罌第一四七三部隊）

第五独立警備隊（至隆第一五六七六部隊）

その他軍直轄部隊（独立山砲第二四大隊、野戦機

関銃中隊、独立輜重第一連隊、電信第九連隊、

自動車第二七連隊、兵站病院六、陸軍病院六）

駐蒙軍（戊第五三〇一部隊）軍司令官中将根本博

独立混成第二旅団（警第五三三一部隊）

第四独立警備隊（至誠第一五六七六部隊）

その他軍直轄部隊（自動車第二三連隊、兵站病院

四、陸軍病院三、独立有線中隊二）

残留部隊編制（昭和二十一年四月）

大同地区特務団

特務団司令 林豊大佐、副官岩滝栄一中尉

副総副司令 五味丑之助少佐、副官西尾達雄少尉

参謀 矢島哲夫大尉

本部 高島文義中尉、第七大隊長 道祖尾替吉中

尉、第八大隊長 山内齊大尉、第九大隊長 古

居敏夫大尉、第十大隊長 西本善治大尉、第十

一大隊長 尾崎修三大尉、機甲大隊長 叶谷孝

一大尉

（各大隊三個中隊・一砲銃隊、機甲大隊・自動車

・戦車隊）

残留日本軍、太原地区特務団（第一次）

総司令 三浦三郎中尉

副司令 元泉馨少将、山岡道武少将

参謀 岩田清一少佐、大田黒孝少佐、政治部 城

野宏、陸軍士官学校字野三郎大尉

第一団長 小田切正男、第二団長 今村方策大佐

第三団長 大場孝少佐、第四団長 増田少佐

第五団長 藪田少佐、第六団長 布川直年少佐

砲兵団長 今村方策大佐（兼務）

山西野戦軍第十總隊（第二次）

總司令 今村方策大佐、副司令 岩田清一少佐

參謀長 相樂圭二大尉、政治部 城野 宏

第一團長 小田切正男、第二團長 菊池修一大尉

第三團長 住岡儀一大尉、第四團長 古屋敦雄大

尉（後に増田直年大尉）、第五團長 欠

第六團長 布川直年少佐

太原会戦・閩軍戦闘序列（太原・綏靖公署）

主任 閻錫山、副主任 孫楚

第十兵团（第十九・第三三・第四三軍）、第十五

兵团（第三四・第六一軍）、由孫副主任指揮

（五個師団・三個縱隊他）

太原会戦 共産軍戦闘序列

總指揮 徐向前

城北区指揮部 彭招輝（三個旅団、五個支隊）

城南区指揮部 姚喆（二個縱隊、二個軍区）

城東区指揮部 楊徳志（一個縱隊、一軍区、四個

支隊、三獨立支隊）

城西区指揮部 楊成武（二個縱隊、一軍区）

總予備隊周士第（二個縱隊、砲兵一旅団）

しかし、第一軍と閻錫山との折衝であつたが、結局、昭和二十一年二月末、太原方面では軍人二万三千人、居留民三千人、一方大同地区では軍人二千人、居留民二千人、合計三万人の残留者が確定した。しかし、三月から残留者以外の帰国が始まると、特務団編制となり総数軍民一萬六千人となる。

お国のために戦つた三年間

山口県 井上 勝 清

昭和十八年六月夕方、アツツ島玉砕のニュースを聞いてしていると電報が届き、六月十三日西部第四部隊入隊